人権コラム１月号

黄色いランリュック

神村早織（大阪教育大学）

1999 年、まだ、ランドセルが黒と赤の２色しかなかった時代のことだ。ある企業が、「赤と黒以外のランドセルはないか」という顧客ニーズに応えて、「24 色のランドセル」の商品開発をはじめた。まず最初に行ったのは、ランドセルについて、法律、条例や校則などで決まっているのか調査することだった。法で決まっているのならば、商品開発は中止だ。しかし、答えは NO だった。いや、校則にすら決められていないものが、全国の小学校であたかも日本の伝統であるかのように続いていたのだ。ここからこの企業の商品開発が正式にスタートし、「24 色のランドセル」は爆発的にヒット、日本の小学校の風景を劇的に変えることになる。

学生たちからは「祖父母に決められたけど、本当は○○色が欲しかった」という声を多数聞く。しかし、その中で、いつも何人かから「私は黄色いランリュックだった。学校全員それだから、ランドセルは誰も買ってなかった」という声があがる。ランリュックとは、教科書やノートなどの出し入れがしやすいように作られた安価で軽量なリュックサックのことである。ランリュックとは何なのか。それはいつどのようにして生まれたのか。製作会社の Web から一部抜粋しよう。

> 昭和４２年当時、ランドセルは非常に重く・・また、年々高級化し、保護者の経済的負担も大きくなり・・そんな中、ある小学校の校長先生が、保護者から、「私の家は貧しいから子供に高価なランドセルを買ってやれないので、豚革のランドセルを買いました。子供は喜んで、いつから学校へ行けるのや、と毎日楽しみにしておりました。」「いよいよ学校が始まり、楽しそうに通学しておりましたところ、ある日学校の帰り道、お前のランドセルは・・豚やと言って・・いじめられるので、・・子供が学校へ行くのがいやだと申します」と切々と話されたことがきっかけで、校長先生が当社にランドセルに代わる通学カバンの作成を依頼されました。　https://www.ranlic.jp/

ランドセルとは、大正天皇の学習院初等科入学の際の献上品として贈られたものがはじまりだという。大変高価なものであり、戦前はもちろんのこと、戦後もしばらくは一般に広がることはなかった。昭和 30 年代高度経済成長の時代に入り、いわゆる「一般庶民」にも「学習院型」ランドセルは広がっていった。しかし、価格高騰が問題となり、昭和 40 年代から各地でランドセル廃止運動が起きた。ランドセル業界にとっては存亡の危機である。学校長会、PTA、教育委員会などへのロビー活動を行ったり、業界内における高級品自粛の呼びかけなどをおこない、廃止運動を下火にさせたという記録がある。（ランドセル 130 年史　https://www.randoseru.gr.jp/ebook/book/）

こうしてみると、「黄色いランリュック」製作の背景となった校長先生の話は、まさにランドセル廃止運動の高まりの中で起きたひとつの出来事であったことがわかる。世界中で日本のような高価なカバンを子どもに持たせている国はない。私たちは、まずは赤黒２色の呪縛からは脱却できた。次は、時代の変化にあわせた機能的で安価なカバンへと変革していく時期ではないだろうか。